

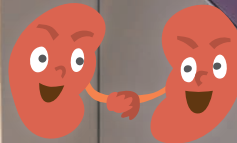
慢性腎臓病は、日本では成人の8人に1人が罹患しているとみられる新たな国民病です。微量な蛋白質で慢性腎臓病を早期発見するのが尿中アルブミン検査です。



医学協会の新たな検査、人間ドックに「尿中アルブミン検査」を無料で追加の導入いたします。

県内初です!!

ほぐら腎臓は、そら豆のような形をした握りこぶし大の臓器で、腰の少し上、左右ほほ対象に2個あります!



臨床検査技師
渡部 美穂子

PROFILE 新潟市西区在住。最近の日課は、ウェルネスの隣に建設中の新潟健診スクエアの工事現場を、休憩中や帰宅時に臨床検査部の窓から眺めることです。間近で大きな重機が動く様子や、日々変化する現場の様子に興味津々です。新施設の完成まで楽しみたいと思います。

慢性腎臓病 (CKD) と尿中アルブミン検査

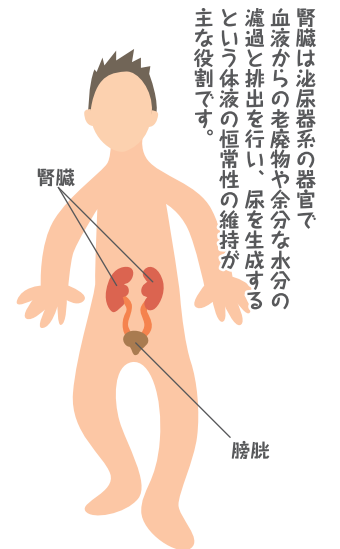
慢性腎臓病 (CKD) は何らかの障害を受けて腎機能が低下し、老廃物の排出が上手く出来なくなったり、尿中に蛋白質が漏れ出てしまう状態が続く、**慢性的に経過するすべての腎臓病**を表します。

日本では成人の8人に1人が罹患しているとみられ、新たな国民病ともいわれています。今回は慢性腎臓病と当会の新たな検査、「尿中アルブミン検査」のおはなしです。

日本の透析の現状について

腎臓は「沈黙の臓器」とも呼ばれ、その名のとおり異常があっても自覚症状が乏しく、発見される頃には症状がかなり進んでいることが少なくありません。腎機能の低下が進行すると将来的に透析療法や腎移植が必要となる可能性があり、併せて心筋梗塞や脳卒中、心不全などのリスクも上昇します。そのため早期発見、早期治療が重要な鍵となります。

2020年度の全国の透析患者数は約35万人にのぼり、**透析の三大原因**となる疾患として、糖尿病の合併症である糖尿病性腎症、高血圧や加齢などの影響による腎硬化症、免疫の異常などが関わる慢性糸球体腎炎が挙げられます。



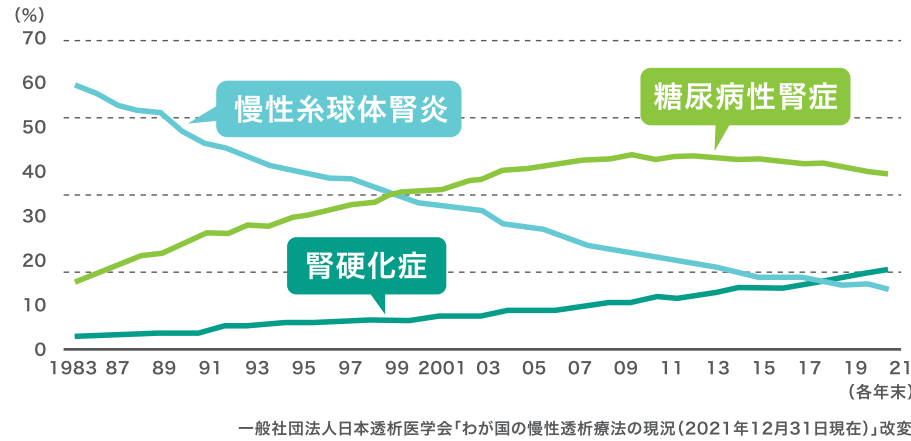
慢性透析患者数と有病率の推移



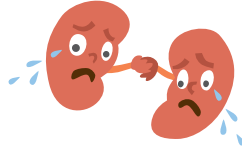
一般社団法人日本透析医学会「わが国の慢性透析療法の現況(2021年12月31日現在)」改変

その中で近年、新規に透析導入の原因として圧倒的に多いのが糖尿病性腎症です。糖尿病性腎症の早期発見、早期治療に取り組むことは必須であり、国としても厚生労働省や日本糖尿病対策推進会議などが「糖尿病性腎症重症化予防プログラム」を策定し、その対策に取り組んでいます。

透析導入患者の原疾患の推移



医学協会の「尿中アルブミン検査」で早期に腎臓の異常を発見してもらいましょう。



早期に治療を始めれば進行を防ぐことができます。あなたの腎臓を守りましょうね。

蛋白尿の検査について

人間ドックや一般健康診断時の腎臓の検査の一つに、皆さんにも馴染みの尿検査があります。尿検査は採取に痛みがなく、多くの情報が得られる優れた検査です。

先程もお話ししましたが、腎臓が障害を受けると尿に蛋白質が漏れ出てしまいます。尿検査にも様々な検査がありますが、一般に健康診断で行われているのは、尿に試験紙を浸し、変色具合によって蛋白質を判定する定性試験です。

当会では令和4年4月から、より早期に腎疾患を発見することを目的に、尿蛋白陽性としてB判定(±)の報告を開始しました。尿蛋白(±)は「糖尿病性腎症重症化予防プログラム」の中で腎疾患の早期発見のきっかけとしても挙げられています。

令和3年度までは(-)で報告していた(±)ですが、令和4年10月現在、人間ドックを受診された36,845名の方の定性結果を集計したところ、10,672名 約3割にのぼりました。

人間ドック受診者の尿蛋白の定性結果 (令和4年4月から10月)

尿蛋白	人数(名)	割合(%)
(-)	24,160	65.5
(±)	10,672	29.0
(1+)	1,706	4.6
(2+)	250	0.7
(3+)	57	0.2
合計	36,845	100.0

しかし、人間ドックでは前日の食事制限などで水分の摂取が少ない傾向があり、尿が濃縮され、本来(-)の方が(±)となっている可能性もあります。そこで、登場するのが濃縮の影響を受けず、かつ、腎疾患をより早期に見つけてくれる優れたもの「尿中アルブミン検査」です。

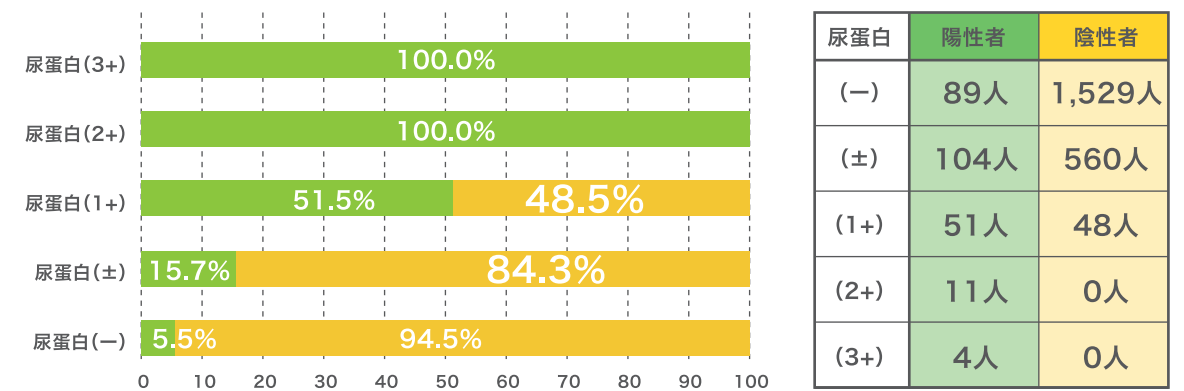
尿中アルブミン検査について

尿中のアルブミンは一般的な尿検査では検出できないほどのわずかな蛋白質で、糖尿病などによって腎臓が障害を受け始めた早期から尿中に排泄されます。この段階で糖尿病性腎症をはじめとする慢性腎臓病が発見されれば、早期に治療が開始され、進行を防ぐことも、場合によっては回復させることも可能です。

尿中アルブミンの排泄量が増加している場合は将来的に糖尿病性腎症へ移行する確率が高いといわれ、糖尿病性腎症の重症度分類にも用いられています。また、尿中アルブミンは高血圧や動脈硬化症、メタボリック症候群などから起こる血管内皮細胞障害のマーカーでもあるため、健診時における心血管障害の検出にも有用です。

今回、人間ドックを受診された2,396名に対し尿中アルブミンの測定を追加実施し、尿蛋白定性と尿中アルブミンの陽性者一致率を検証しました。

蛋白定性と尿中アルブミン陽性者の一致率



定性試験で尿蛋白(3+)、(2+)の方はすべて尿中アルブミンも陽性でしたが、尿蛋白(1+)では48.5%、尿蛋白(±)では84.3%がアルブミン陰性で、本来陰性となるべき検体を陽性として拾いすぎていました。また、尿蛋白(-)ではアルブミン陽性が5.5%となり、陽性となるべき検体の一部が見逃されてしまうケースがあることも分かりました。

スクリーニング検査として現在行っている尿蛋白の試験紙法は、尿蛋白が高度な(3+)、(2+)では尿中アルブミンとの一致率が高いのですが、低濃度な(1+)、(±)では精度が劣ると考えられます。そこで、見逃したくない微量な蛋白「尿中アルブミン」の検査を、今年度より人間ドックに導入することとしました。

医学協会が県内初の実施!人間ドックで尿中アルブミン検査

人間ドックで尿中アルブミンを実施するのは国内でも皆無に近く、県内では当会が初めてです。糖尿病性腎症をはじめとする慢性腎臓病、その先に待ち構える透析への進行を防ぐためにも「沈黙の臓器」腎臓の小さな声に耳を傾け、早期発見・早期治療を目指しましょう。